女子大学生の神経性無食欲症傾向における人物画の特徴について

森　優衣[1]・石田　弓[2]

Feature of the draw-a-person test in a women's college student's anorexia nervosa tendency

Yui Mori and Yumi Ishida

We investigated the quantitative features of portrait drawings by female university students who were identified as having a tendency toward anorexia nervosa. The participants were 107 female university students. They were assessed with the Draw-a-Person test and EAT-26 questionnaire. The results suggested that the group with higher tendency toward anorexia nervosa showed ambiguous gender representations and gender identity problems. The same group also produced a smaller number of portraits of the whole body, which may be caused because of body image difficulties. However, “narcissistic self-image,” which was closely related to anorexia nervosa (Mine, 1990) , was not found in the group. This suggested a difference in terms of “narcissistic self-image” between the group with a tendency toward anorexia nervosa and the clinical group with anorexia nervosa.

Key words：Anorexia nervosa tendency，Draw-A-Person test

問題と目的

神経性無食欲症と神経性無食欲症傾向

神経性無食欲症 (anorexia nervosa：以下 AN) は，摂食障害の一分類であり，その特徴として，痩せ願望や強い肥満恐怖，身体像の障害，病識の欠如といった症状を持つ。AN はその 95%が女性であるとされ，青年期に発症することが多いが，近年では低年齢化が進んでいる。AN を含めた摂食障害の背景には，痩せた体型を称賛する社会的圧力といった社会的要因や，家族の機能不全などの家族的要因，性役割に関する問題といった個人内要因など，次元を異にする様々な要因が関係していることがこれまでの研究によって明らかになっている (大森，2005) 。近年 AN は増加傾向にあり，厚生労働省 (2011) によると 1990 年代の後半だけで 4 倍の増加が見られている。また，食事制

[1] 広島大学大学院教育学研究科
[2] 広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター

限や運動といったダイエットが一般化していることから，こうした AN の病理群に至らないまでも，痩せ願望や身体像の障害といった AN の症状を部分的に持っている AN 傾向の増加も指摘されている。AN 傾向を AN と連続変数的に捉える考え方もあり，広く健常者を対象とした研究が必要とされている。

AN と自己愛

AN は自己愛と深く関連すると考えられている。AN 患者は，痩せて美しくなることや，痩せて成功しようとすることによって自己愛を満たそうとする (梶，1998) 。また，AN 患者の中には，「自分は完璧な正しい人間だと思っていた」，「痩せていることで人にない優れたものを持っていると感じられる」といった，肥大した自己愛的な自己イメージを持つ者もいる (生地，2000) 。松木 (1997) は，AN の患者が極度に痩せた身体を作り上げることは，そのこと自体に没頭していく自己愛的な充足であるとしている。

AN と性役割

AN には，ジェンダーアイデンティティの障害が見られ，これは性転換者の障害を形作る原初水準の障害ではなく，ジェンダー・ロール・アイデンティティ (性的役割アイデンティティ) の障害である (松木，1997) 。同様に，摂食障害傾向においても性役割の問題があるとする研究は多く見られる。鈴木・伊藤 (2001) の研究では，女性が摂食障害傾向に至る要因として，性的同一性の問題や，女性性の受容，異性意識が高いことなどを挙げている。また，「女性らしさ」とは，①母体を想起させるふくよかな身体，②対男性としての女性のスリムな身体に分類され，ふくよかな身体をネガティブに評価し，身体的性に固執することで摂食障害傾向が高まるとしている (古山，2002) 。

Eating Attitudes Test-26 (EAT-26)

AN 傾向をスクリーニングする尺度として，EAT-26 がある。これは Mukai,Crogo,&Shisslak (1994) によって作成された，神経性無食欲症に特徴的な摂食態度や食行動などの臨床症状などをもとに作成された尺度であり，健常者と臨床群やリスク・グループを弁別するスクリーニング，臨床群の重症度評価，あるいは健常者が大部分と考えられるサンプルにおける食行動異常度を測定する目的で用いられる。EAT-26 の得点が 9 点以下の者は食行動正常群，10～19 点の者は食行動中程度障害群，20 点以上の者は食行動重度障害群に分類される。EAT-26 の得点が高いほど，AN 傾向が高くなる。

摂食障害の治療と投映法

摂食障害患者との面接に投映法が有効であるとする研究もある。安藤 (2002) は，16 歳女性の摂食障害者との面接にロールシャッハテスト，星と波テスト，コラージュといった投映法を使用した。病識が無く，治療の必要性を感じていない患者に対して，直接会話をすることよりも，投映法を介して面接をするほうが効果的と考えられた。安藤 (2002) は，投映法を介してコミュニケーションをすることによって，面接の活性化や，ラポールの形成に効用があるとしている。安藤 (2002) の研究では，上記の投映法が用いられていたが，人物画テストは性的役割の問題や対人関係の問題などを見ることができるため，人物画テストも摂食障害患者との面接に有用なのではないかと考えられる。

人物画テスト

人物画テストは，Machover よって考案された，同性像と異性像の 2 枚の人物画を描かせるテストである。人物画は何らかの形で自己像が現れることが多いが，その他，自分の心に影響を与えている重要な人の姿や，一般的な他者への認知が表現され，対人関係の認知の仕方が現れやすい。特に同性像には自己像が，異性像は対人関係が投映されやすいと考えられる (高橋，2008) 。

また，通常の被検者は，両者の性差を明確に表現するものである。人物画の性差を明確に表現するためには，被検者が性の同一化を確立し，自分の性的役割を体験として認知することが必要である (高橋，1974) 。男性像と女性像の描画の比較によると，描く順序，画像の相対的な高さ，性別の外観は，主観的には描き手の自分自身に対する感情と自己対象の性的同一性に関係がある (Marvin，1999　菊池・溝口訳　2002) 。高橋・高橋 (2010) は，人物画における性差の表現を 5 段階で評価している。第 1 段階は，性差が不明の絵，第 2 段階は性差の特徴を 1 ～2 個用いて性差を少し表現している絵，第 3 段階は性差の特徴を数個用いて性差をかなり表現している絵，第 4 段階は性差の特徴を多く用いて性差を明白に表現しているが，一方の人物像の性別がややあいまいな絵，第 5 段階は性差が明白に表現されている絵である。高橋・高橋 (2010) によると，性差は身体の特徴，衣服の特徴，姿勢の特徴に示されている。性的役割の分化した人や精神的に健康な人は，一般に第 4 段階や第 5 段階の絵を描くが，精神障害者は低い段階の絵を描くことが多いとされている。

また，人物画において，衣服的自己愛 (社会的自己愛) と身体的自己愛の 2 つの自己愛が見られる。高橋 (1974) は，通常の被検者は人物画の衣服を適度に描き，詳細すぎる描き方もしないし，裸体も描かないと述べている。衣服の様相を詳細に描画することを衣服的自己愛と呼び，衣服よりも身体の様相を詳細に描画することを社会的自己愛と呼ぶ (高橋・高橋，2010) 。衣服的自己愛の人は，外界の物事や人々そのものに関心を持たず，周辺的なもので自分が認められたいという欲求を持っており，社交的，外交的な性格で，強迫傾向が目立つことがあるとされ，身体的自己愛の人は，自分に没頭する内向的な人であり，自己愛傾向が強く，社交に対して満足を見出すことができず，空想にふけることを好みがちであるとされている (高橋・高橋，2010) 。

摂食障害における人物画テストの特徴

摂食障害の患者に対して HTP テストなどの投映法を描画療法として用いた三根 (1990) の研究では，人物画において AN 患者と神経性大食症 (bulimia nervosa：以下 BN) 患者に異なる表現が見られた。AN においては，「ナルシスチック・セルフ・イメージ」，輪郭線の協調，部分的な身体像が観察された。「ナルシスチック・セルフ・イメージ」とは，人物画，自由画において描かれた美しいドレス姿の女性像や花嫁姿，十二単の平安調女性など病者の自己愛的理想像の投映と思われる表現を指す (三根，1990) 。また，BN においては，幼少児，漫画的か，または稚拙な子供っぽい表現，丸い輪郭，余白が多いことが観察された。AN において，「ナルシスチック・セルフ・イメージ」が見られなかった患者の予後が良好であった。「ナルシスチック・セルフ・イメージ」の有無と予後の関係から，AN に人物画テストを用いることで，AN の重症度を知る手段となるのではないかと考えられる。そこで，AN 特有の人物画の特徴を検討する必要があるが，三根 (1990) の研究は事例研究であり，数量的な処理は行われていない。そこで，本研究では，AN 傾向において「ナルシスチッ

ク・セルフ・イメージ」がみられるかどうかを数量的に検討する。

目的

本研究では，一般の女子大学生において，AN 傾向がどのくらいの割合で見られるか，EAT-26 の得点や BMI について検討すること, AN 傾向に特徴的な人物画の表現を検討することを目的とする。特に，三根 (1990) の研究における描画特徴を参考にし，AN 傾向が高い人の人物画と AN 傾向が低い人の人物画を数量的に比較する。また，AN 傾向には，性的同一性の問題が見られることから，同性像と異性像の 2 枚の絵を描く人物画テストを行い，性的同一性の問題が人物画においても見られるかどうかを検討する。

三根 (1990) の「ナルシスチック・セルフ・イメージ」や高橋 (1974) ，高橋・高橋 (2010) の衣服的自己愛・身体的自己愛の表現が，AN 傾向の高い群の人物画に見られることが予想される。また，AN において伝統的な女性役割の否定や，性的同一性の問題があることが指摘されていることから，AN 傾向高群の人物画では AN 傾向低群の人物画と比較して，性差表現が曖昧になり，高橋・高橋 (2010) の第Ⅲ段階や第Ⅱ段階の人物画を描く人が多いことが予想される。本研究において，臨床群と同様の結果が AN 傾向高群でも得られた場合，人物画テストと尺度によるスクリーニングの両方を行うことによって，摂食障害の早期発見につながるのではないかと考えられる。

方法

調査参加者

女子大学生 107 名 (平均年齢 20.7 歳，*SD*=.90) が調査に参加した。

手続き

集団法，宿題法で行った。集団法と宿題法で描画の教示などに違いが出ないようにするため，教示は全て質問紙内に記述し，全ての用具を封筒に入れたものを配布した。

用具

A4 判封筒，質問冊子 (人物画テスト・描画後の質問 (Post Drawing Interview:PDI) ・EAT-26・フェイス項目) ，A4 判の画用紙 2 枚，B の黒鉛筆 2 本を使用した。

質問冊子の構成

人物画テスト　高橋・高橋 (2010) を参考に，同性像と異性像の 2 枚の人物画を描く 2 枚法で行った。「いまから，あなたに人物の絵を 1 人描いてもらいます。これは，絵の上手・下手を問うものではないので，気楽な気持ちで行ってください。しかし，いいかげんに描くのではなく，できるだけ丁寧に描いて下さい。写生したり，何かを見て描くのではなく，自分の思ったように描いて下さい。封筒の中に入っている鉛筆で描いてもらいますが，消しゴムを使ってもかまいません」という教示を質問紙に記述した。また，2 枚目を描く際には，「別の性別の人物を描いてください」という教示を付け加えた。時間の制限として，1 枚あたり 10 分を目安に描くように教示した。身体像の障害によって，身体をどの程度描くのかに違いがみられる可能性があるため，全身像を描くよう教示しなかった。

PDI　高橋・高橋 (2010) を参考に，同性像と異性像の 2 枚の人物画それぞれについて，以下の 4

つの項目について尋ねた。人物画テストの教示と同様の質問紙に自由記述してもらった。①人物の性別について：「この人は自分と同性ですか，異性ですか。」②人物の年齢について：「この人は何歳くらいですか。」③想像した人物について：「あなたは，誰かを想像してこの人を描いたのですか。もしそうなら誰ですか。」④描きにくさについて：「あなたが描こうと思ったように描けましたか。描きにくいところはありませんでしたか」

EAT-26（Mukai at el.,1994）　「摂食制限」，「大食と食事支配」，「肥満恐怖」の 3 つの下位尺度によって構成され，26 項目よりなる。「全くない」から「いつもそう」の 6 件法で回答を求めた。総得点は開発者の方法に従って「全くない」，「まれに」，「ときどき」までは 0 点とし，「しばしば」，「非常にひんぱん」，「いつもそう」をそれぞれ 1，2，3 点として合計した。得点が高いほど AN 傾向が高いことを示している。

フェイス項目　フェイス項目として，年齢，身長，現在体重を尋ねた。

人物画の評定

評定方法　人物画の評定は，評定項目に従って筆者が評定した。

評定項目　高橋・高橋 (2010) を参考に，人物画の基本的な描画形式と，自己愛や性的同一性の問題を示す描画内容に関する評価項目を定めたものを Table1 に示した。また，高橋 (2010) における性差表現を表す項目を Table2 に示した。

Table1

人物画の評価項目

描画形式	描画内容
小さいサイズ	男性を先に描く
大きいサイズ	漫画的な絵
切断	抽象的な絵
横向き	男性像＞女性像
詳細さの欠如	男性像≒女性像
過度の詳細さ	男性像＜女性像
省略	詳細な衣服
	詳細な身体
	裸体

Table2

人物画の性差表現に関する評価項目

	性差表現	
≪顔≫	≪体型≫	≪装飾品≫
顔全体の様相	肩	ネクタイ
頭髪	筋肉	帽子
顔の輪郭	乳房と胸部	リボン
目		アクセサリー
まつ毛	≪衣服≫	眼鏡
眉毛	シャツとブラウス	マニキュア
鼻	衣服のデザイン	所持品
しわ	その他衣服	
唇		
ひげ		

結果

参加者の属性

得られた 107 名のデータのうち，体重の欠損値があった 7 名と，どちらも同性の絵を描いた 3 名を除いた 97 名のデータを分析対象とした。EAT-26 の平均点は 5.76 (*SD*=6.50) であり，最大値は 42 点，最小値は 0 点であった。EAT-26 の得点が 10 点を超えた食行動中程度障害群は 12 名であり，全体の 12%であった。また，20 点を超えた食行動重度障害群は 4 名であり，全体の 4%であった。食行動中度障害群と食行動重度障害群を合計すると 16 名となり，全体の 16%であった。

本研究では，一般の女子大学生を対象としているため，EAT-26 のカットオフポイントである 20 点を超える者は少なかった。そこで, EAT-26 の得点によって, 上位 25% (*n*=22) ，中位 50% (*n*=55) ，下位 25% (*n*=20) に分類し，それぞれ AN 傾向高群，中群，低群とした。参加者全体と AN 傾向各群における EAT-26 の平均値と標準偏差を Table3 に示した。また，AN 傾向各群における年齢，体重，身長，BMI (体格指数：Body Math Index) の平均値と標準偏差を Table4 に示した。AN 傾向各群における身長・体重・BMI の平均値の分散分析を行ったところ，年齢：F (2, 94) =.56，身長：F (2, 94) =2.25，体重：F (2, 94) =.346，BMI：F (2, 94) =.843 で有意差は見られなかった。

Table3

参加者全体と AN 傾向各群における EAT-26 の平均値（*SD*）

	参加者全体（*n*=97）	AN傾向高群（*n*=22）	AN傾向中群（*n*=55）	AN傾向低群（*n*=20）
EAT-26得点	5.76(6.50)	14.45(8.66)	4.18(1.60)	0.55(.510)

Table4

AN 傾向各群における

年齢・体重・身長・BMI の平均値（*SD*）と有意確立

	AN傾向高群（*n*=22）	AN傾向中群（*n*=55）	AN傾向低群（*n*=20）	有意確立
年齢	20.64(.95)	20.67(.96)	20.9(.64)	0.57
身長(m)	1.584(.05)	1.569(.04)	1.591(.05)	0.11
体重(kg)	50.82(6.10)	49.22(6.38)	51.50(7.61)	0.35
BMI	20.23(2.07)	19.99(2.42)	20.32(2.79)	0.84

1枚目	2枚目
1枚目；はかま姿の女性	
2枚目；大きなリボンのドレス姿の女性	

Figure1. **ナルシスチック・セルフ・イメージの人物画** (筆者による模写)

「ナルシスチック・セルフ・イメージ」の検討

三根 (1990) における「ナルシスチック・セルフ・イメージ」に該当するような人物画は，同性像を 2 枚描き除外された 3 名のうちの 1 例しか見られなかったため、量的な検討はできなかった。EAT-26 の得点は 6 点であり，中群に位置した (Figure 1) 。普段着ないであろう袴姿の女性と，ドレスのような服を着た女性を描いていたため，ナルシスチック・セルフ・イメージに該当すると評価した。

描画特徴に関する分析

顔のみ・上半身・全身に関する比較　人物画において，身体をどの程度まで描けているか，顔だけの人物画，上半身まで描かれた人物画，全身を描いた人物画の 3 つに分類し，3 群の χ^2 検定を行った (Table5) 。同性像において顔のみを描いた人物画に有意差が見られ (χ^2=9.86，p<.01) ，残差分析の結果，AN 傾向高群は中群と比較して，顔のみを描いた人物画が多くみられた (p<.01) 。異性像においても顔のみの人物画に有意差が見られ (χ^2=7.52，p<.05) ，残差分析の結果，AN 傾向高群は中群と比較して，顔のみの人物画が多く見られた (p<.05) 。また，異性像において全身の人物画に有意傾向が見られ (χ^2=5.51，p<.10) ，残差分析の結果，AN 傾向中群は高群と比較して，全身を描いた人物画が多く見られる傾向にあった (p<.10) 。

描画形式の比較　描画形式について，同性像と異性像それぞれに関して 3 群の χ^2 検定を行った (Table6) 。同性像の横向きの人物画にのみ有意傾向が見られ (χ^2=5.23，p<.10) ，残差分析の結果，AN 傾向低群は中群と比較して横向きの人物画が多く見られた (p<.10) 。

描画内容の比較　描画内容について，3 群の χ^2 検定を行ったが，有意差は見られなかった (Table7) 。

性差表現の比較　高橋 (2010) に基づいて，得られた人物画を性差表現によって 5 段階に分類した。本研究では，見られた性差表現の項目数によって独自の段階規準を定めた。Table2 で示した人物画の性差の表現の項目の内，性差表現が見られなかったものを I 段階，性差表現が 1～3 項目で見られたものをⅡ段階，性差表現が 4～6 項目で見られたものをⅢ段階，7 項目以上で性差表現が見られたが，片方の性別が分かりにくいものをⅣ段階，7 項目以上で見られ，両方の性別が単独でも判断できるものをⅤ段階とした。それぞれの性差表現段階の典型例を Figure2～6 に示した。

Table5

AN 傾向各群の顔のみ・上半身・全身の出現度数（%）

	同性像						異性像			
	AN傾向高群（n=22）	AN傾向中群（n=55）	AN傾向低群（n=20）	χ^2			AN傾向高群（n=22）	AN傾向中群（n=55）	AN傾向低群（n=20）	χ^2
顔のみ	10(45.45)	7(12.73)	6(30.0)	9.86	**	高＞中	9(40.91)	7(12.73)	5(25.0)	7.52
上半身	1(4.55)	9(16.36)	3(15.0)	1.95			3(13.64)	9(16.36)	5(25.0)	1.06
全身	11(50.0)	39(70.91)	11(55.0)	3.62			10(45.45)	39(70.91)	10(50.0)	5.51

**:p<.01，*:p<.05，†:p<.10

Table6

AN 傾向各群の描画形式の出現度数（%）

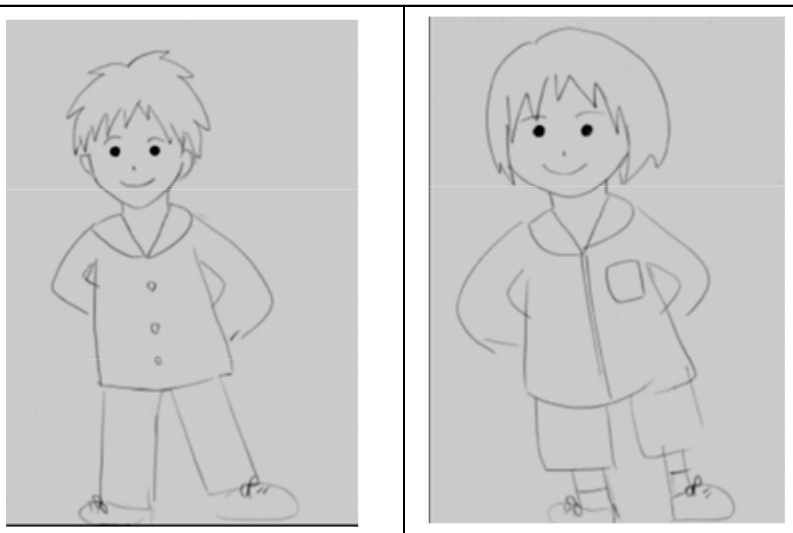
	同性像						異性像			
	AN傾向高群（n=22）	AN傾向中群（n=55）	AN傾向低群（n=20）	χ^2			AN傾向高群（n=22）	AN傾向中群（n=55）	AN傾向低群（n=20）	χ^2
小さいサイズ	3(13.64)	10(18.18)	1(5.0)	2.08			5(22.73)	11(20.0)	1(5.0)	2.82
大きいサイズ	1(4.55)	7(12.73)	2(10.0)	2.88			1(4.55)	6(10.91)	2(10.0)	0.77
切断	1(4.55)	11(20.0)	3(15.0)	2.88			1(4.55)	12(21.82)	2(10.0)	4.16
横向き	1(4.55)	1(1.82)	3(15.0)	5.23	†	低＞中	1(4.55)	1(1.82)	1(5.0)	0.7
詳細さの欠如	0(0)	4(7.27)	0(0)	3.19			0(0)	4(7.27)	0(0)	3.19
過度の詳細さ	2(9.10)	7(12.73)	2(10.0)	0.25			2(9.10)	6(10.91)	2(10.0)	0.06
省略	4(18.18)	18(31.73)	5(25.0)	1.76			6(27.27)	23(41.82)	6(30.0)	1.85

†:p<.10

Table7

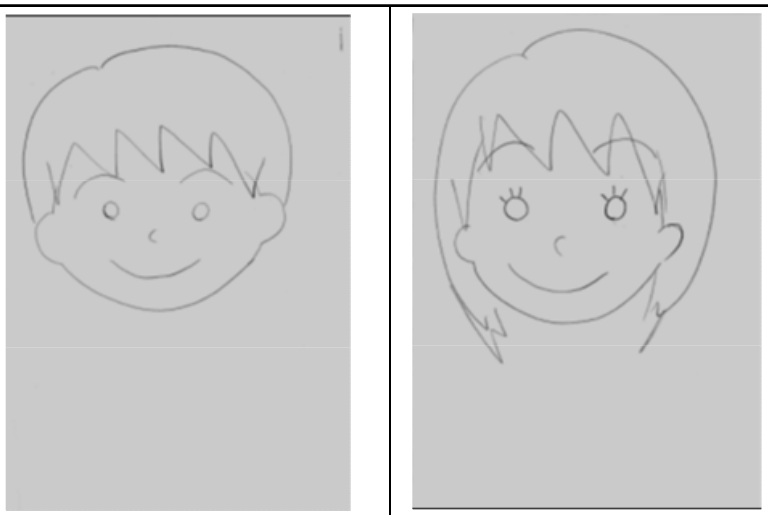
AN 傾向各群における描画内容の出現度数（%）

	AN傾向高群（n=22）	AN傾向中群（n=55）	AN傾向低群（n=20）	χ^2
男性を先に描く	2(9.10)	11(20.0)	5(25.0)	1.93
漫画的な絵	4(18.18)	5(9.10)	5(25.0)	3.33
抽象的な絵	0(0)	3(5.45)	0(0)	2.36
男性像＞女性像	3(13.64)	6(10.91)	1(5.0)	0.89
男性像≒女性像	17(77.27)	46(83.64)	15(75.0)	0.87
男性像＜女性像	2(9.10)	3(5.45)	4(20.0)	3.69
詳細な衣服	2(9.10)	7(12.73)	3(15.0)	0.35
裸体	0(0)	0(0)	1(5.0)	3.89



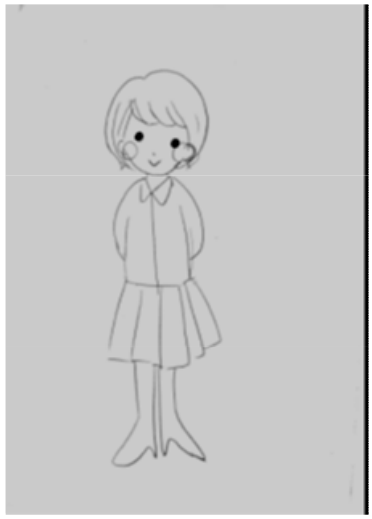
男性像	女性像
二つの人物画に性差を明確に示す特徴がなく，両方の人物画がほぼ同じに描かれているもの	

Figure2. Ⅰ段階の人物画 (筆者による模写)



男性像	女性像
少し性差が表現されているもの。	

Figure3. Ⅱ段階の人物画 (筆者による模写)



男性像	女性像
性差の特徴を数個用いて性差を表現しているもの。	

Figure4. Ⅲ段階の人物画 (筆者による模写)

男性像	女性像
性差表現は明確であるが，片方の人物画だけでは性別が判断しにくいもの。	

Figure5. Ⅳ段階の人物画 (筆者による模写)

男性像	女性像
性差表現が明確で，片方の人物画だけでも性別が判断できる。	

Figure6. Ⅴ段階の人物画 (筆者による模写)

Table8

AN 傾向各群における性差表現段階の出現度数 (%)

	AN傾向高群 (n=22)	AN傾向中群 (n=55)	AN傾向低群 (n=20)	χ^2		
Ⅰ	1(4.5)	2(3.6)	0(0)	0.85		
Ⅱ	6(27.3)	6(10.9)	1(5.0)	5.16	†	高＞中，高＞低
Ⅲ	9(40.9)	11(20.0)	7(35.0)	4.06		
Ⅳ	1(4.54)	4(7.27)	2(10.0)	0.47		
Ⅴ	5(22.7)	32(58.2)	10(50.0)	7.93	*	中＞高，低＞高

*:p<.05，†:p<.10

それぞれの段階における AN 傾向各群の人数に関して，3 群の χ^2 検定を行った (Table8) 。Ⅱ段階において有意傾向が見られ (χ^2=7.52，p<.05) ，残差分析の結果，AN 傾向高群は中群と比較してⅡ段階が多く見られる傾向にあり (p<.10) ，Ⅴ段階が少なかった (p<.05) 。また，AN 傾向高群は低群と比較しても，Ⅱ段階が多く見られる傾向にあり (p<.10) ，Ⅴ段階が少なかった (p<.05) 。

考察

参加者の EAT-26 得点および BMI について

本調査において，EAT-26 の得点が 10 点を超えた食行動中程度障害群は 12 名であり，20 点を超えた食行動重度障害群は 4 名であった。また，BMI が 18.5 以下の「痩せ型」に当てはまる人は 24 名で，全体のおよそ 25%に及んだ。食行動重度障害群において，BMI が 18.5 以下のものは 1 名であり，食行動中度障害群において，BMI が 18.5 以下のものは 1 名であった。また，AN 傾向各群に

おいて身長・体重・BMI に差は見られなかった。したがって，一般の女子大学生においては，痩せ型であることは必ずしも AN 傾向と結びつかないと考えられる。また，EAT-26 の項目の内，「もっとやせたいという気持ちで頭がいっぱいです」という項目に「しばしば」，「非常にひんぱん」，「いつもそう」と答えた人の割合は全体のおよそ 45%であり，EAT-26 の得点が 10 点を超えた人の全員が，この項目において「しばしば」，「非常にひんぱん」，「いつもそう」と答えていた。これらのことから，AN 傾向は痩せたいという気持ちと関係していることが考えられる。AN 傾向は，AN の患者のように痩せを呈している人は少ないが，AN の患者と同じように痩せ願望を持っている。AN の発症に至らないようにするためにも，早期に介入することが重要であると考えられる。

「ナルシスチック・セルフ・イメージ」について

三根 (1990) における，「ナルシスチック・セルフ・イメージ」は除外された同性像を 2 枚書いた 3 例ののうちの 1 例に見られた。これは，AN 傾向高群において「ナルシスチック・セルフ・イメージ」が見られるという仮説を支持しない結果となった。

描画特徴について

顔のみ・上半身・全身に関する比較　AN 傾向中群と比較して，AN 傾向高群では，顔のみの人物画が同性像・異性像ともに多く見られる傾向にあった。また，全身の異性像も，AN 傾向中群と比較して，AN 傾向高群では少なかった。AN 傾向高群の女子大学生には AN の病状の 1 つである「身体像の障害」があり，身体をイメージすることが難しかったために，AN 傾向高群の女子大学生では，顔のみの人物画が多くなり，全身を描くことが少なかったことが推察される。

描画形式と描画内容について　描画形式においては，AN 傾向高群と，AN 傾向中群・低群の間に差は見られなかった。また，描画内容においては，3 群で有意差が見られなかったため，描画内容においては性的同一性の問題や自己愛の問題は見出せなかった。本研究の参加者の多くは健康度の高い女子大学生であったために描画形式や描画内容に差が見られなかったのではないかと考えられる。

性差表現の比較　AN 傾向高群は，AN 傾向低群や中群と比較して，Ⅱ段階が多い傾向にあり，Ⅴ段階が少なかった。これは，AN 傾向高群の人物画で性差表現が曖昧になるという仮説を支持する結果となった。Ⅱ段階は性差表現をほとんど用いていない性差表現の曖昧な人物画であり，Ⅴ段階は性差表現を多く用いている性差表現が明確な人物画である。Ⅱ段階の絵は，健康な精神状態の成人の被検者が描くことは少なく，性的役割を確立していないことが多い (高橋，2010) 。したがって，AN 傾向高群は，AN 傾向低群や中群と比較して，性的同一化を確立できておらず，自分の性的役割を確立できていないことが考えられる。また，斎藤 (2004) は，AN 傾向と女性役割との関連において 3 つの指摘があるとしている。それは， (a) 社会情勢の変化に伴う女性らしさの希薄化という社会文化的要因を問題とする指摘， (b) 女性役割特性は社会から期待される役割と個人が望む役割に葛藤が生じやすいために摂食障害の要因になっているのではないかとする指摘， (c) 女性役割に過剰に適応しようとすることによって摂食障害を発症するのではないかという指摘の 3 つである。本研究では，AN 傾向の高い群において性差表現が曖昧であるⅡ段階の絵が多くみられたことから，女性の役割に過剰に適応しているというよりも，女性役割の希薄化や女性役割葛藤による影響が人

物画に表れたことが考えられる。

総合考察

本研究の成果

本研究では，AN 傾向高群の特徴として，顔のみの人物画が多く，全身の人物画が少ないこと，性差表現が曖昧な人物画が多いことが明らかになった。これは，AN 傾向高群の人物画で性差表現が曖昧になるという仮説を支持する結果となった。しかし AN 傾向高群では，身体像の障害や，性的同一化の問題はあるものの，三根 (1990) の「ナルシスチック・セルフ・イメージ」や，自己愛的な描画特徴は見られなかったことから，AN の病理群に見られるような自己愛の問題は持っていないことが考えられる。

今後の課題

本研究では，人物画の教示の際に，「顔のみではなく，全身を描いてください」という教示をしなかった。そのため，「全身を描いてください」という教示をした上での検討も必要と考えられる。また，AN 傾向には AN の病理群に見られるような「ナルシスチック・セルフ・イメージ」は見られなかったことから，AN 傾向と AN の病理群では，自己愛に関する違いがあるのではないかと考えられる。そこで，自己愛について尺度等を用いて検討することも重要であると考えられる。

本研究では，摂食障害のうちの AN 傾向のみを対象としたため，BN 傾向についてはまだ明らかになっていない。AN から BN に移行するケースも多いとされており，AN 傾向と BN 傾向との一致点や，相違点に関して検討することも重要であると考えられる。

引用文献

安藤満代 (2002) . 16 歳女性の摂食障害者との面接に投映法が有効であった事例 北関東医学会，**52**，385-391.

古山知恵美 (2003) . 摂食障害傾向と性役割認知の関連について ; 年令差の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要，**50**，342-343.

長谷俊彦 (1965) . 人物画評価の客観性の検討 人文論究，**16**，51-64.

久松由華・坪井康次・筒井末春・篠田知璋 (2000) . 一般女子大学生に対する摂食障害の一次スクリーニング法についての検討 心身医学 **40**，325-331.

厚生労働省 (2011) . 摂食障害みんなのメンタルヘルス総合サイト< http://www.mhlw.go.jp/kokoro/speciality/detail_eat.html< (2013 年 1 月 27 日)

MarvinLeibowitz (1999) .INTERPRETING PROJECTIVE DRAWINGS:*A Self Psychological Aproach* (マーヴィン・レボヴィッツ 菊地道子・溝口純二 (監訳) (2002) 投映描画法の解釈 誠信書房)

松木邦裕 (1997) . 摂食障害の治療技法 金剛出版

三根芳明 (1990) . 摂食障害の絵画表現について—神経性無食欲症と神経性大食症との比較— 芸術療法学会誌，**21**，135-145.

盛田真理子 (2010) . 女子青年における強迫性，アレキシサイミア，抑うつと神経性食欲不振症傾向

の関連 心身医学，50，857-862.
大森智恵 (2005) . 摂食障害傾向を持つ女子大生の性格特性について パーソナリティ研究，**13**，242-251.
生地　新 (2000) . 現代の大学生における自己愛の病理 心身医学，**40**，192-197.
鈴木幹子・伊藤裕子 (2001) . 女子青年における女性性受容と摂食障害傾向—自尊感情，身体満足度，異性意識を媒体として— 青年心理学研究，**13**，31-46
梶　厳 (1998) . 自己愛病理から見た摂食障害の理解と治療 心身医学，**38**，156-157.
高橋雅春 (1974) . 描画テスト入門　文教書院
高橋雅春・高橋依子 (2010) . 人物画テスト 北大路書房
高橋依子 (2008) . 描画法 小川俊樹 (編集) 現代のエスプリ 投映法の現在 至文堂 pp.164-174.